

《実践報告》

## 保育者養成においてKeynoteを利用した ドキュメンテーション型保育記録作成の試み ～ナナホシテントウと親しみをもって接する幼児の姿を題材として～

佐々木 郁子 (現代教育研究所研究員 東京経営短期大学 こども教育学科)

### 1. 研究の背景

近年の待機児童問題や保育士不足問題といった保育の量的拡充に関する議論と並行して、どのように保育の質を確保・向上させるかという議論がある。保育の質の確保と向上には保育内容の自己評価を通して保育者の専門性や保育の改善・充実を図ることが求められる。厚生労働省(2020)による「保育所における自己評価ガイドライン(2020年改訂版)」を参照すると、保育所における保育内容等の自己評価の前提として、保育記録とその活用の方法が整理されている。その中で、保育記録における写真・動画・図の活用が、後で振り返る場合や他の職員・保護者と共有する際に、その時の様子をより具体的に描きやすくなると述べられている。このように、保育記録の工夫の仕方によって保育の省察や振り返りに有効になる。保育記録の工夫の仕方として、例えば、「エピソード記述」や「マップ型記録」のような日本において発展してきた記録や、近年では、ドキュメンテーション、ポートフォリオ、ラーニング・ストーリーなど、各国や地域の歴史的・文化的・社会的な背景や哲学・思想をもった記録の方法(例えば、イタリアのレッジョ・エミリアのドキュメンテーションや、ニュージーランドのマーガレット・カーによるラーニング・ストーリーなど)を日本の保育の現状や実態に合わせて活用するといった動きもある(大豆生田2021)。また、保育者や研究者が独自に工夫した保育記録もある。例えば、佐々木(2019, 2020)は、発達心理学者 Vasudevi Reddy が提唱する二人称的アプローチを基にして、保育者と乳幼児のかかわり方を記述する様相モデルを提案している。

保育記録を用いた幼児理解の重要性は、保育者養成で学ぶ学生にもあてはまる。幼児理解に対する学生の学びの質的な変化を促すために、どのような保育記録の方法を用いるかを考えることが大切である。例えば、保育実習記録に「学びの過程の可視化」という特徴をもつドキュメンテーションを用いた試みもある(例えば、岩田ら 2019; 陸路ら 2019; 亀山ら 2019)。ドキュメンテーション型保育記録(ドキュメンテーションを用いた保育記録)は、プリントアウトされた写真等を活用した保育記録であり、保育が視覚化されるという特徴をもつことから、保育を学ぶ学生に対して「気づき」や「振り返り」を促す機能があると思われる。岩田ら(2019)は、実習日誌にドキュメンテーション記録を導入する場合の意義と課題について検討している。その結果、ドキュメンテーション型を用いた実習日誌によって、実習生が、子どもの遊びの楽しさやおもしろさに気づきやすくなること、実習生を含む保育者同士が保育や子どもについて、共に考えていく関係になりやすいことを明らかにしており、ドキュメンテーション型を用いた実習日誌の有用性を明らかにしている。

また、ドキュメンテーション型保育記録が作成可能なシステムを取り入れたICTシステム「CoDMON」(コドモン)や「KIDSNA」(キズナコネクト)も開発されているが、園向けのシステム

であり保育者養成の学生の学びを支援するシステムではない。しかしながら、今後、保育者養成においてもICTシステムを活用した保育記録に関する実践が増えてくる可能性がある。

## 2. 研究の目的と方法

筆者が保育者養成校において保育記録の書き方を指導していると、保育記録をどのように記述すればよいのかわからない、記述する内容さえも思い浮かばないといった学生が少なくない。そこで、本研究ではドキュメンテーション型保育記録に着目する。その理由は、ドキュメンテーション型保育記録により子どもの日常生活や遊び、学びの過程を視覚化することで、学生の「気づき」を促すと考えた。

また、写真を記録・保存する媒体も変化している。以前はカメラで被写体を撮影するとフィルムに記録され、それを専用紙に印刷して見ていたが、現在ではスマートフォンやiPadなどに内蔵されているカメラで撮影すると電子データとして保存され、画面上に表示して見るが多くなってきた。そこで、本研究の目的は、保育者養成校の実習事後指導を想定して、スマートフォンの画面上でドキュメンテーション型保育記録を作成する実践を試みる。ここで、保育記録は、「時間」、「環境構成」、「子どもの活動」、「保育者の援助・留意点」、「実習生の動きと気づき」の5項目で構成されることが多いが、本実践では「気づき」の部分のみ作成する。筆者はこれまで学生に対して保育記録の指導を行ってきたが、「気づき」が考えられない、記述することができないと悩む学生が多いと筆者自身が感じているからである。

さらに、使用するデバイスについて、教員はiPad、学生はスマートフォンを用いる。日常的に使用して操作に慣れているデバイスを用いることが、学生への認知的負荷を低減させると考えられる。また、ドキュメンテーション型保育記録の作成にあたり、アプリケーション「Keynote」を用いた。KeynoteはApple社により開発されたプレゼンテーション用のフリーアプリケーションであり、スマートフォンのタッチパネルで操作可能なため、キーボード操作がほとんど必要ない。したがって、スマートフォンでメールする、SNSに投稿する、インターネットで検索するといった操作ができれば、学生にとって技能的な負荷は殆どかからないと考えられることから、保育者養成における授業内で使用可能であると考えた。また、写真をプリントアウトせずに直接使用できることや、動画も取り入れることができるということが、写真をプリントアウトして模造紙等の紙上で作成するドキュメンテーション記録とは異なる。

研究の方法は、筆者が保存している動画を用いて、筆者が担当するゼミの学生に協力してもらいドキュメンテーション型保育記録を作成する実践を行う。ここで、実践はグループによる共同作業で行う。その結果を考察し、保育者養成校における実習事後指導の中にドキュメンテーション型保育記録を取り入れる可能性について検討する。ここで、ドキュメンテーション型保育記録の作成において写真及び動画を撮影することが非常に重要であるが、今回は写真及び動画の撮影後の工程のみ行うこととし、使用する写真及び動画は筆者が予め用意したものを使用する。写真及び動画は「ナナホシテントウ」に関する内容である。ナナホシテントウと親しむ幼児の姿を題材とすることにより、幼稚園教育要領 第2章 環境 3 (3) に示されている「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てる」ことについての学生の理解を促すことも期待できると考えた。

### 3. 結果と考察

#### [1] Keynoteを利用したドキュメンテーション型保育記録の作成の手順

はじめに事前準備の内容と作成手順を検討した。その結果得られた事前準備の内容を表1に、Keynoteを用いたドキュメンテーション型保育記録作成の手順を表2に示す。

表1は事前準備の内容についてまとめたものである。授業時間を90分に想定するため、授業開始後に写真や動画の準備、情報機器の接続および動作確認を行おうとすると、何等かのトラブルが発生した際に授業時間が不足する、あるいは授業を行うことができない事態に陥る可能性があるからである。そのため、使用する写真や動画を用意する、学生がスマートフォンを使用可能な状態で用意する(特にバッテリーレベルの低下から作業実行不可能な状態に陥らないことが大切である)、教員はiPadと大型ディスプレイを接続する、アプリケーションのインストール及び動作確認することは授業開始前に済ませておくことが必要であると考えた。

表1. 事前準備の内容

	内容	詳細
1	使用する写真や動画	本実践では予め用意された写真や動画を使用する
2	学生が各自所有するスマートフォン	情報セキュリティへの配慮等の説明も行う
3	(教員用) iPad	教員は作業量が多いためiPadを使用する
4	大型ディスプレイ	教員用のiPadを説明用に投影するために使用する
5	Keynoteのインストールと動作確認	スライドを共有して共同作業可能な状態にする

表2. Keynoteを用いたドキュメンテーション型保育記録作成の手順

手順	内容	作成上の留意点	情報機器の操作
1	写真や動画(オブジェクト)を選定してスライドに挿入する	・動画に対してポスターフレームを選定する ・スマートフォンは横置きにする	・上部タブの「+」 >写真またはビデオ
2	描写から子どもの気持ちを読み取りコメント欄に記入する	・コメント欄は編集可能であることを伝える	・オブジェクトを指定 >コメント
3	「気づき」を考えてコメント欄に記入する	・手順2で記入した子どもの気持ちと区別するために最初に「★」をつけることを伝える	・オブジェクトを指定 >コメント
4	「タイトル」を話し合いスライドに記入する	・グループで一つのタイトルを決める ・スライドへの記入はテキストボックスを利用する	・上部タブの「+」 >図形>基本
5	話し合いの後に「気づき」を修正・追加する	・コメントに「返信する」と新たなコメント欄が作成されるので編集機能を用いることを伝える	・コメントの編集機能

次に、表2はKeynoteを活用したドキュメンテーション型保育記録作成の手順をまとめたものである。手順1では、写真や動画を選定してスライドに挿入する。通常、ドキュメンテーション型保育記録の作成は写真や動画を撮影する段階も含まれているが、今回の実践では、教員が予め写真や動画を

用意していることから、この段階を省略している。教員が予め写真及び動画を用意する理由は、保育者養成の授業内で子どもの写真や動画を撮影できない。また、学生同士で写真や動画を撮影する場合、撮影のタイミングや場面、写り方にばかり気を取られてしまい、写真を撮ることだけに時間がかかり、他の作業を行う時間の確保が困難になる。手順2は、写真及び動画の描写から子どもの気持ちを読み取りコメント機能を用いて記入する。手順3は、「気づき」を考えてコメント機能を用いて記入する。手順4は、「タイトル」を話し合いスライドに記入する。手順5は、話し合いの後に「気づき」を修正・追加する。学生相互で自他のコメントをもとに話し合い、その結果をふまえて、それぞれの学生が自身の「気づき」を修正・追加する。以上の手順で作成する。

## [2] Keynoteを利用したドキュメンテーション型保育記録作成の実践

以下の要領で実践した。また、実践前の昼休みを利用して表1に示した事前準備を行った。

対象：保育者養成系短期大学の2年生 10名

実施日時：2021年7月8日（木）3限

教員はiPad、学生は全員スマートフォンを使用した。また、実践中の学生の発話をICレコーダー（Sony製 ICD-PX240）に記録した。実践の様子を図1に示す。

### (1) 写真や動画（オブジェクト）を選定してスライドに挿入する

ドキュメンテーション型保育記録に用いる写真及び動画は学生に撮影してもらうのではなく、本実践では教員が用意した。写真及び動画の内容は保育者が幼児（1歳11カ月）にナナホシテントウを手渡す場面である。教員が写真及び動画を学生とアプリケーションLINE上で共有し、一名の学生が2枚の写真と1本の動画を画面に挿入した（図2における最右のみ動画）。動画に対しては不要部分のトリミング及びポスターフレーム機能を用いて動画の一場面を指定した。ポスターフレーム機能はYouTubeのサムネイルにあたり、動画の内容を最も代表していると思われるシーンを表示する、動画の表紙である。



図1. 実践の様子

### (2) 描写から子どもの気持ちを読み取りコメント欄に記入する

教員は、子どもの表情・動作・発話内容を客観的に捉え、それをもとに子どもの気持ちを読み取るように助言した。さらに、子どもの気持ちを個人的な認識枠組を用いて読み取ることをしないようにすることも付け加えた。

### (3) 「気づき」を考えてコメント欄に記入する

各学生がコメント機能を用いて写真及び動画に「気づき」を入力した。「気づき」を入力すると即時に学生全員が入力された内容を共有できるようになっている。

## (4)「タイトル」を話し合いスライドに記入する

スライド全体のタイトルを学生同士で話し合った。最初、一人の学生から「虫とボク」という案が出された。直後に他の複数の学生から、もっと興味を惹きそうなタイトルにするべきだという意見が出され、最終的には「僕だってできるもん!!」というタイトルになった。このことは、保護者や他の保育者にも見られる場合を想定した話し合いが行われたことを示している。

## (5) 話し合いの後に「気づき」を修正・追加する

学生同士でお互いの「気づき」を見あい、その内容について質問しあい、コメントを述べるなどした。その後、各自が自分の「気づき」を修正・追加した。

完成した画面と「気づき」の表示画面をそれぞれ図2および図3に示す。図2において、各写真及び動画の左上に正方形のアイコンがある。写真及び動画のいずれかを指定して、正方形のアイコンをタップするとコメント作成者の氏名とともにコメントが図3のように表示される。複数の学生が同時に気づきを記入することが可能である。なお、使用した写真及び動画の被写体である幼児の保護者には、本論文に掲載する旨の許諾を得ている。



図2. 完成画面

## [3] ドキュメンテーション型保育記録作成中の「気づき」に関する話し合いの様子

ICレコーダーで記録した発話データをもとに、ドキュメンテーション型保育記録作成の5段階目「話し合いの後に「気づき」を修正・追加する」の場面における学生同士の話し合いの様子の例を2つ取り上げる。

## 例1)

学生Aは手順3の「気づき」を考えて記入する場面において、最初に「(保育者が子どもに) てんとう虫を葉っぱごと渡していた」と書いた(括弧内は筆者が補足した)。その後、5段階目の話し合いにおいて、他の学生(B, Cとする)と、次の会話をしている。

B: (Aの「気づき」を読み、自分でも写真を拡大してしながら)「あ、本当だ」

C:「葉っぱいらないよね」

B:「でもさ、てんとう虫って気持ち悪いとか嘔みそうで怖いって思う子もいるよね。」

私、小さいころてんとう虫も触れなかったし。今も触れないけど」

A:「興味はあるけど触れないっていう場合もあるか…。だから葉っぱの上に乗つけた」

C:「料理じゃねえし」

以上の会話の後に、学生Aは図3における一番下の記述内容に修正している。その内容は「保育者

は子どもが驚いたり嫌がらないように、あえて葉っぱごと渡していた。興味関心があるという気持ちを潰さないために無理強いしないようにしていた」である。学生Aは最初、保育者はナナホシテントウを葉っぱごと子どもに渡していたという事実を書いていただけである。それが何故なのかについては書かれていなかった。他の学生と会話し、写真を拡大するなどして会話の内容を確認することにより、何故、保育者がナナホシテントウを葉っぱの上に乗せて子どもに渡していたのかに気付いたと思われる。したがって、学生Aにとって学びが深まったと考えられる。この場面では、学生Aの「気づき」が図3のようにリスト化されていることから気づきの内容が比較可能なことや、スマートフォンの画面から情報を取り入れて考えることが普段から行われていることから、学生にとって気軽に意見を発言しやすい状況だったと考えられる。意見が出やすい状況であることが、学生同士の学びを促進し、学びが深まることにつながったのではないだろうか。

また、振り返りの途中で学生達は何度も写真を拡大したり、動画を再生していた。したがって、Keynoteを用いることにより、それぞれの学生が各々写真を拡大したり、動画を再生しながら振り返ることが可能になったといえる。

例1は、他の学生との振り返りを通して「気づき」を書いた学生が自らの記述内容を修正・追加する例である。

次の例は、他の学生の記述から、新たな「気づき」が得られた例である。

例2)

学生Dは「初めてのとんとう虫に対して怖い、どう扱っていいのかわからないという気持ちが表情から読み取れた。」と書いた。学生Dの「気づき」を読んだ学生Bが、次の発言をしている。

B:「私は、Dみたいに表情は書かなかったわ。でもさ、さっき保育士はテントウ虫を葉っぱの上に乗せて渡そうとしたけどさ、この子、怖がっているところか、メチャクチャ興味もってそうな顔してない？」(子どもの目の周辺を拡大しながら)「目が釘付けじゃん」

C:「単に目力が強いだけでしょ」

B:「写真を拡大してみなよ。すごく興味ありそうにじっととんとう虫をみてる感じしない？」

D:「初めて近くで見たから興味があるけど怖い、みたいな感じか。何て書けばいいんだろ」

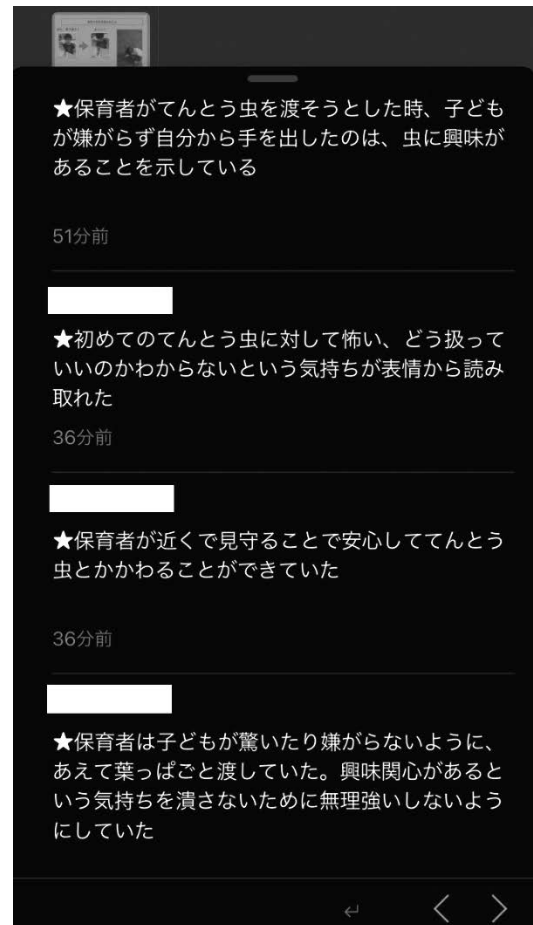


図3. 「気づき」の表示画面

この話の後に学生Dは自らの「気づき」を修正・追加することはしなかった。しかしながら、学生Dの最後の発言から、単なる怖さだけではなく興味もあるのだと読み取っていることがわかる。また、学生Bは、学生Dの「気づき」を切っ掛けとして、画像を拡大して子どもの表情を読み取り、自らも新たな「気づき」を得ていることがわかる。

#### [4] 学生の感想

最後に学生に感想を書いてももらったところ、表3に示す記述が得られた。一人で複数の感想を書いた学生もあり、表3には、すべての記述内容を載せている。

感想の中には、使用機器（スマートフォン）の画面が小さいことによる操作のしにくさや、データを消去されることへの不安に関する記述がある。画面が小さいことに対する操作のしにくさについては、学生が普段からスマートフォンの操作で行っていると思われるピンチオープン（ピンチアウト）を利用して画面を拡大すれば対処可能である。また、クラウド上で保存するなどの工夫によりデータが消えるといった不安も解消される。一方、感想の中で多数を占めているのが、写真や動画によるわかりやすさ、振り返りのしやすさに関する記述であり、学生はKeynoteを利用したドキュメンテーション型保育記録の作成に興味・関心をもったと思われる。

以上により、Keynoteを利用してドキュメンテーション型保育記録を作成することができた。また、学生同士の振り返りの場面で、写真を拡大して子どもの表情を読み取ることや、動画を何回も再生させながら「気づき」を深めた場面も見受けられたことから、保育者養成校における実習事後指導の中に取り入れる可能性があることも示唆された。

表3. 学生の感想

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・慣れるまでは難しいと思うけど、慣れたら使えると思った。</li> <li>・みんなで気軽に見回すことができていると思う。</li> <li>・紙に比べて動画が貼れるのが良いと思った。</li> <li>・普段から操作しているからやりやすい。</li> <li>・実習日誌も写真や動画を載せる方が、言葉で表せないことも伝わるからわかりやすい。</li> <li>・PCに比べて画面が小さくて操作するのが少し大変でした。</li> <li>・紙に比べて写真や動画が使えるので、わかりやすいなと思いました。</li> <li>・日誌を書くよりもわかりやすいとおもった。</li> <li>・視覚と聴覚で内容がわかるので振り返りができやすい。</li> <li>・行う環境（スマホの大きさ、ネットが使えないなど）によってやりやすさがかわってくる。</li> <li>・日誌よりやりやすい！</li> <li>・データが消えたら大変だ…</li> <li>・慣れない作業で機械が苦手な私にはとても難しかったです。</li> <li>・紙でまとめるよりKeynoteだと子どもが実際に虫と触れ合っている姿が載せられるので良いと思った。</li> <li>・操作の仕方が難しかった。</li> <li>・1人の人でつくるのではなく、たくさんの人が共有できてよかったです。</li> <li>・画面が小さく操作の仕方が難しかったです。</li> <li>・文字を小さくしたりするなどの細かい作業の仕方がわかりませんでした。</li> </ul> |
|--|

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、保育者養成校の実習事後指導を想定して、Keynoteを用いてドキュメンテーション型保育記録を作成する実践を試みた。振り返りでは、学生は写真の拡大や動画の再生を活用することにより「気づき」を深化させていることがわかった。また、Keynoteは日ごろからスマートフォンを操作して慣れている学生にとって技術的に大きな困難がなく、保育者養成において様々な活用の可能性が示唆された。また、2019年以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、大学ではオンライン授業を行う機会が増えている。Keynoteは学生同士で共有して遠隔操作が可能なことから、オンライン授業においてドキュメンテーション型保育記録を作成することも可能である。従来のように模造紙や画用紙などの上に作成するドキュメンテーション型保育記録の場合、学生が共同して遠隔操作により作成することが困難であったと思われるが、Keynoteを利用した場合はオンライン授業に取り入れることが可能であるという利点もあることから、今後は本研究の内容をオンライン授業において実践することが課題である。

---

#### 引用文献

- 岩田恵子・大豆生田啓友・鈴木美枝子・田澤里喜・田甫綾野（2019）, 「ドキュメンテーション型実習日誌」の試みと課題, 『論叢』玉川大学教育学部紀要, 19, pp.125-140.
- 亀山秀郎・佐竹智恵子・志方智恵子（2019）, 「認定こども園における実習生が撮影した写真の実習記録への活用」, 『幼児教育WEBジャーナル第2号』, pp.34-41.
- 厚生労働省（2020）, 「保育所における自己評価ガイドライン（2020年改訂版）」.  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000609915.pdf> (last accessed 2021.8.22)
- 大豆生田啓友（2021）, 「保育を「記録する」ことを考える」, 『発達』, 167, pp.2-8.
- 陸路和佳・松本和美・山田吉郎・山室吉考・山里哲史（2019）, 「子どもを視る眼を育む実習日誌について」, 『鶴見大学紀要』, 56(3), pp.65-69.
- 佐々木郁子（2019）, 「保育者と乳幼児のかかわり方を記述する様相モデルの提案～Vasudevi Reddyの人称的かかわりを援用して～」, 『昭和女子大学現代教育研究所紀要』, 5, pp.1-10.
- 佐々木郁子（2020）, 「保育者と乳幼児の相互作用の評価における意図の役割に関する一考察」, 『昭和女子大学現代教育研究所紀要』, 6, pp.1-7.

---

#### 参考文献

- 秋田喜代美・松本理寿輝（2021）, 『保育の質を高めるドキュメンテーション園の物語りの探究』, 中央法規出版.
- 浅井幸子（2021）, 「レッジョ・エミリアのドキュメンテーション」, 『発達』, 167, pp.23-29.
- 橋川喜美代（2014）, 「保育記録から見た学びの生成と保育者の共感的見守り-テ・ファリキとラーニング・ストーリーを通して-」, 『兵庫教育大学研究紀要』, 45, pp.19-29.
- 岩田恵子（2021）, 「ドキュメンテーション記録と写真・ICT活用の効用」, 『発達』, 167, pp.44-50.
- 木村菱治（2012）, 『Keynoteプレゼンテーション実践ガイド』, ラトルズ.
- 厚生労働省（2017）, 保育所保育指針.



文部科学省（2017），幼稚園教育要領。

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017），幼保連携型認定こども園教育・保育要領。

大豆生田啓友・おおえだけいこ（2020），『日本版保育ドキュメンテーションのすすめ』，小学館。

吉岡善美（2021），「写真を利用した記録の工夫—ポートフォリオ・ドキュメンテーション・保育ウェブの活用」，『発達』，167，pp.72-80。